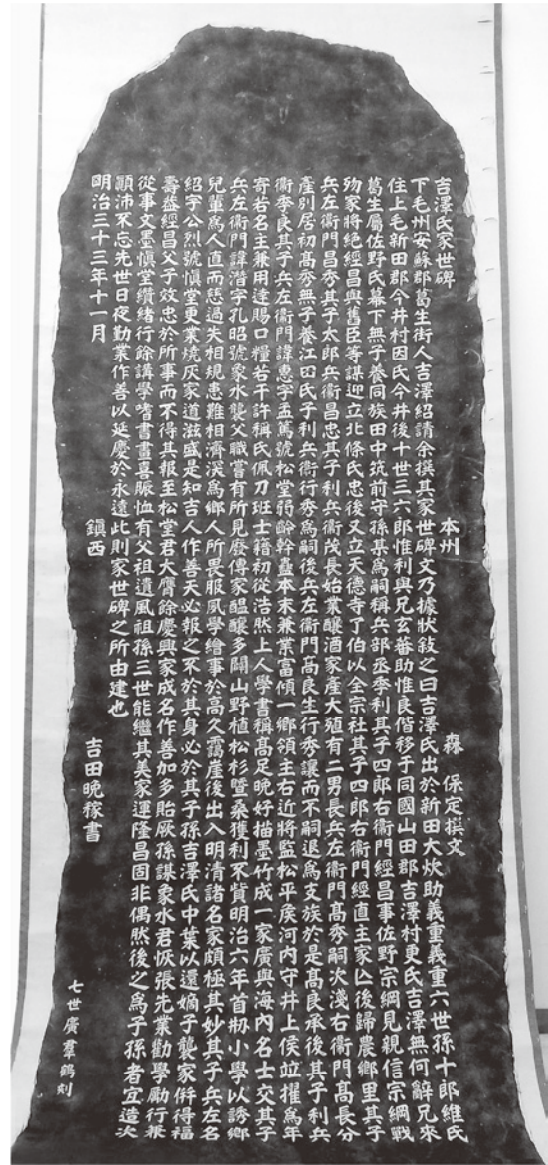




b : 碑陰 (浩然書・渡辺華山画)



a : 碑陽 (森鷗村撰・吉田晚稼書)

「吉澤氏家世碑」明治 33 年(1900) 原寸拓本

碑本体寸 高 456cm×幅 182・4cm×厚 38cm

【口絵写真Ⅱ説明】

吉澤氏家世碑拓本

本資料は、佐野市葛生の旧家・吉澤家の敷地内に現存する「吉澤氏家世碑」の拓本である。同碑は明治三三年（一九〇〇）、吉澤慎堂（初代兵左、一八四六～一九〇五）により建立された。高四五六cm、幅一八二・四cmと見上げるほどの大きさの純白の碑である。茨城県久慈郡真弓山産出の白寒水石、すなわち大理石（結晶質石灰岩）の一種を使用しており、明治六年に石灰会社を立ち上げた慎堂らしい選択である。なお、同地の寒水石は明治前期に彫刻用石材としてラギーザ（彫刻家、御雇外国人）が使用していることから質の良さがうかがえる。

自然形状の両面碑で、碑陽（表面）に森鷗村（一八三一～一九〇七）撰の銘文（吉田晚稼揮毫）が、碑陰には現在の栃木市にある出流山満願寺の浩然上人（一七四六～一八一五）の書《承明》と江戸時代を代表する文人画家・渡辺崋山（一七九三～一八四一）の画《風竹図》が刻まれる。彫刻は七世廣群鶴。

碑陰の書画はいずれも慎堂の祖父にあたる吉澤松堂（十一代兵左衛門、一七八九～一八六六）にゆかりのものである。薩摩出身で文化三年（一八〇六）から六年ほど満願寺に在住した浩然は、松堂の書の師であり、同寺には佐野の門人たちによる顕彰碑（佐藤一斎撰）が現存する。崋山の《風竹図》は、松堂への為書を持つ天保九年（一八三八）の作で、原画は

吉澤記念美術館に寄託されている。崋山は画中に清代の文人画家・鄭板橋の「風の葉音にも民の苦しみを思う」という内容の詩を書き添えて、「富みて義を好む」松堂に対し「貧者を庇護せよ」と記す（この画については本誌三五号参照）。

銘文を撰じた森鷗村は安積良斎・藤森弘庵に学んだ藤岡の儒者で「贈田中正造翁十首」「鉞毒歌」などが知られ、門下に岩崎清七・片山潜らがいる。かつて葛生で塾を開いて慎堂もそこに学び、生前の松堂とも親交があった。銘文では吉澤家歴代の事績を皮切りに、松堂以降慎堂までの業績と文化活動・社会貢献をうたい、子孫はこれら先祖のことを忘れず日夜業に勤め善をなすようにと述べる。

碑の完成に伴い原寸の拓本が制作されたほか、明治三六年には縮小版が印刷発行され、そのうちの一本が金井之恭により天覧に供された（贈前内閣書記官金井之恭君『鷗村先生遺稿』）。また碑は同家来客時の記念撮影スポットだったらしく、頭山満（須永元とも親交）や吉田三郎（彫刻家）等との記念写真が残る。私邸内に建てられ、子孫への戒めを基本機能とする非公開の碑でありながら、拓本・印刷複製・記念写真によってその存在と内容が流布し、渡辺崋山とゆかり深い「文雅の家」という吉澤家のイメージを形成したものと思われる。

（末武さとみ記）